

今回は、1月24日に行われました日本口腔顔面痛学会心身医学セミナーについて東京医科歯科大学の山崎陽子先生に、報告していただきます。

日本口腔顔面痛学会心身医学セミナー参加報告

東京医科歯科大学 口腔顔面痛制御学分野 山崎陽子

日本口腔顔面痛学会心身医学セミナーは、平成28年1月24日(日)に慶応義塾大学病院にて開催された。口腔顔面痛学会では、この領域のセミナーは初めてであるということもあり、記録的な寒波の中、多数の参加者が参集した。セミナーの冒頭、北里大学医学部精神科講師の宮地英雄先生より当セミナーの趣旨について御説明があり、セミナーが開始された。



参加者で満員の会場風景

午前の講義は、北里大学医学部精神科学主任教授の宮岡等先生による「精神医学総論」に始まり、精神科の医師が精神疾患をどのように捉えているのかを御教示いただいた。その後、宮地英雄先生とお二人で「精神医学における疼痛の位置づけと考え方」、「対応の基本的な考え方」、「心を見る技術」についてお話いただいた。疼痛と精神障害の関係や、コミュニケーション技術で必要な傾聴、受容、共感を実際どのような点に気をつけて実施すればよいか、またMW分類を参考とした治療手順などについて分かりやすく御説明いただいた。さらに、DMS-5についても触れ、身体表現性障害や疼痛性障害の分類が記載さ

れなくなったこと、精神科では疾患の分類に対する考え方に変化があることを御教示いただいた。

続いて実際の症例も数例御呈示いただき、宮岡先生の体験談も交えながら、歯科と精神科との連携についてお話しいただいた。宮岡先生の熱の入った御講演に、歯科での症状や治療に対する説明の重要性や薬剤投与の際の危険性を改めて痛感した。そして、精神科との連携の難しさを考えさせられた。



宮岡 等 先生



宮地 英雄 先生

午後は宮地英雄先生、村岡渡先生が司会を務められ、2症例のケースカンファレンスを行い、会場参加型総合ディスカッションを行った。最初の症例は昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座顎関節症治療学部門の渡邊友希先生が左あごの痛みの症例を呈示なさった。症例の概要が示された後、所見や問診内容に会場から積極



ディスカッション中の会場

的な質問があり、症例の全貌を理解しようとする参加者の意欲が伝わってきた。その後精神科で診察する際に気になる点を宮岡先生が質問された。患者の怒りや不満をしっかりと聞き出すこと、また話しづらい、舌が動かしづらいなど、訴えている神経症状をきちんと検索することの重要性をお話しいただいた。

2例目は、東京医科大学口腔外科慢性疼痛外来の岡本彩子先生が、左下唇に不快な違和感のある症例を呈示なさった。症状自体は手術後の神経障害に起因する感覚異常が中心となる症例と思われたが、症状が長期に渡るときには、患者の社会的背景や情動

の変化についても気を配る必要があると気付かされる内容であった。

今回のセミナーでは、全体を通して活発なディスカッションが行われ、さらに宮岡先生の軽快なコメントが会場を盛り上げていた。熱気あふれる議論の中、歯科医師が責任を持って説明と治療を行う重要性を再認識させられたセミナーとなった。症状により、適切に精神科へ紹介すべき症例は確かに存在する。しかし、その前に歯科医師は自身の診療の内容を振り返ってみる必要があるかもしれない。